

「はじめてのキリスト教」 説教要約

(コロサイ3・22)4・1

一、奴隸と主人たち

新約聖書の中には「奴隸」ということが多く出てまいります。理由は、キリストの善き知らせが伝えられて行つたからです。古来、戦争が当たり前のように行われていた時代でしたから、戦いがあつて、相手国に勝つと捕虜として連れて来て、奴隸としました。反対に自分たちが負ければ、相手国の捕虜になりました。南王国ユダのバビロン捕囚がそうでした。ところが古代ペルシアは、なぜかユダヤ人に対して寛大に扱いました。こうしてバビロン捕囚が終わり、マケドニアが制する時代を経て、ローマ帝国が霸権を握る時代になりました。新約聖書の舞台となつたのは、古代ローマ帝国が治める時代でした。そうしますと、当時の世界の至る所に奴隸がいました。奴隸と言つても様々でして、家の財産管理を任せられた奴隸、家庭教師となつた奴隸、書記役を務めた奴隸もいました。中には、ひどい仕打ちを受けた奴隸もいたようです。そして、奴隸の身分で主イエス・キリストを信じた奴隸たちも大勢いました。彼らは、主人やその家人たちと共に、

二、奴隸たちに見る福音

集会場として使われていた、比較的に大きな家の一室で、主人と共に礼拝を献げていました。奴隸にそういうことが許されたのは、主人が救われたからでしょうね。人は主イエス・キリストを信じて、信仰表明としてのバプテスマを受けることによって、新しく変えられました。いつの時代にも人は変わらないものです。ですがキリストを信じると、人は変わらぬだと教えられます。

すべてのことについて地上の主人に従いなさい。人の「機嫌取りのよくな、うわべだけの仕え方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい。」とあります。奴隸の身分であって、主イエス・キリストを信じた者たちに対する勧めは、「奴隸たちよ、すべてのことについて地上の主人に従いなさい」であることが分かります。奴隸の身分でイエス・キリストを信じた者たちに対して、自分が置かれた境遇から解かれるようになると、コロサイ書は勧めていないことが分かります。エペソ書も同じです。ペテロの手紙第一もそうです。その意味は、奴隸の身分の人はそこから解かれようと考へてはいけません、という意味ではなかつたと思います。コリント人への手紙第一7章21節でパウロは、「あなたが奴隸の状態で召されたのなら、そのこ

とを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、その機会を用いたらよいでしょう」と語っていますから。これを私たちに当てはめるなら、自分が不幸に感じている時に、それを環境の所為にしないこと、かと思います。もちろん、自分を取り巻く環境が改善されたら、感謝なことです。ですが、キリストの善き知らせは、「自分を取り巻く環境が悪いから、私はこうなった」という論法を認めません。紀元一世紀の時代と今とでは、社会状況がまったく異なりますが、みことばの真理は不变です。だれでもキリストを信じるなら、神さまとの信頼関係ができるがります。その人の人生も開かれるようになります。22節後半と、23節を見てまいります。〈人のご機嫌取りのよつな、うわべだけの仕え方ではなく、主を恐れつつ、真心から従いなさい。何をするにも、人に対してもなく、主に対してもするよう、心から行いなさい。〉とあります。キリストを信じた者は、イエスさまがそうであったように、世にあってしても、べの姿として生きることになります。その意味は、自分はキリストのしもべであるから、しもべの姿になるということであって、本当に人のしもべ（奴隸）になるという意味ではありません。まさしく、〈何をするにも、人に対してもではなく、主に対してもするよう、心から行いなさい〉です。

三、主人たちに見る福音

4章1節を見てまいります。〈主人たちよ。あなたがたは、自分たちも天に主人を持つ者だと知っているのですから、奴隸に対して正義と公平を示しなさい。〉とあります。主人たちに見る福音とは何なのでしょうか。それは、主イエス・キリストを信じますと、奴隸の身分の者たちも、この世での主人も、聖なる神の前に等距離である、と知ることです。それが分かるからこそ、3章11節にありますように、〈そ〉には、ギリシア人もユダヤ人もなく、割礼のある者もない者も、未開の人も、スキタイ人も、奴隸も自由人もありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。このことばを、この世での主人が聞き、納得したなら、だれもが「その通りだ」と納得します。これが、キリストの善き知らせの力であって、神のことばによる変化です。『私のほうが偉いんだ』と考え、その思いから抜け出せない人がいたとしたら、なんと不自由なことかと、私共キリストを信じる者は思います。そういう状態は、言い換えるなら「罪の奴隸」です。パウロは語りました。〈神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隸でしたが、伝えられた教えの規範に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隸となりました。〉(□ーマ6・17～18)と。